

海洋文化館リニューアルについて

後藤 明（南山大学 人文学部）

1. 海洋文化館の建造とその後の経緯

海洋文化館は1975年に沖縄本土復帰を記念して開催された、沖縄国際海洋博覧会当時、政府出典の海洋文化パビリオンとして建造された。博覧会は「海、その望ましい未来」を標語に開催され、海洋文化パビリオンは「大海原に生きる人々」を趣旨として建造された。

オセアニア、東南アジア、そして日本から1500点弱の民族資料が収集された。当時の資料収集に関する文書としては、それを取り仕切ったNAV（日本映像記録センター）による『75 EXPO 日本政府出展：海洋文化館調査報告』（牛山 1975）が残されている。また資料収集担当者が書いたと聞く資料収集カルテは、現在沖縄の公文書館に保管されていることを確かめている。海洋博当時出版された『海洋博覧会公式ガイドブック』の中に数ページにわたって海洋文化館の紹介がある。その中に「研究者が現地の生活にとけこんで調査、収集」という節があり、オセアニア学会関係者の活躍が記されている。そこには、そのような現地調査は「生やさしい苦勞ではなく、実際に行方不明になって心配させた研究者もいたほどである」と書かれている（財団法人沖縄国際海洋博覧会協会 1975: 53）。

海洋博覧会は当時通産省が担当していたため海洋文化館も当初は通産省管轄であったが、やがて海洋博公園が国営公園として建設省の管轄に移り、館の管轄も同様であった。その後海洋博公園は水族館や植物園を包摂する総合的な施設として沖縄観光を牽引してきたが、転機を迎えるのは2002年の沖縄美ら海水族館の新設であった。なお2001年中央省庁再統合によって海洋博公園と海洋文化館は現在、国交省の管轄となっている。そして海洋博公園はハード面が国交省の出先機関である国営沖縄記念公園事務所（以下事務所）であり、一方、運営は海洋博記念公園管理財団（以下、財団）という二重構造となっている。財団は市場化テストの導入を期に、2012年沖縄美ら島財団と名称を変えている。なお海洋文化館に関してはこの間人類学サイドからはとくに考察はみあたらないが¹⁾、カルチュラルスタディーズ的な論評では、「南洋エキゾチズム」のような、どちらかというとながティブなイメージが表明されていた（多田 2004; 藤巻 2008）。

2. 海洋文化館の展示更新

＜更新への経緯＞

1995年度には「映像資料の退色、外国客の増加」に対応して、1年間休館して以下の改修が行われた。(1)展示室にロフトのイントロダクションコーナーの設置、(2) 展示ショーケースの修復と反転、(3)エントランスホールに進貢船の設置、(4)プラネタリウムの椅子の修繕である。

1) カヌーに関しては改修業務の進展とともに若干考察がある（後藤 2009b, 2013a; 後藤・石村 2011; 如法寺 2013）。

2002 年度には（財）日本造園修景協会会長・三好勝彦氏を委員長に「国営沖縄記念公園長期構想検討業務」が開催され、三好氏は「沖縄館が欠けたことによる海洋文化館の課題」、「郷土村との一体的な展開」などを提起されたと聞く。そして美ら海水族館の成功の余勢を駆って海洋文化館にも新たな展開が必要と感じた、当時の松江正彦事務所所長が2003年に海洋文化館の資料評価を提案した。この年たまたま出版されていた拙著『海を渡ったモンゴロイド』（2003）をきっかけに映像プロジェクト「バハリ」を共に立ち上げ懇意にしていたスタジオ海工房に相談が来て、その主管である門田修氏が筆者を推薦した²⁾。調査にあたっては価値がない場合、資料は廃棄もあると聞いた。しかし筆者はこの資料はきわめて貴重である、とくにカヌーのコレクションは一級品であるとの評価を伝えた。

資料の価値を認識した松江所長は平成2004年2月、三好氏を委員長に「海洋博覧会地区沖縄文化・センターゾーン活性化検討業務委員会」を招集した。オセアニア学会からは秋道智彌氏と筆者がメンバーであったが、2回ほど委員会が開催されたあと所長の交代などもあって事業はストップしてしまった。その後、筆者はリニューアル事業が立ち消えになるのを懸念しつつ、2004年財団の企画した講演会「太平洋を渡ったモンゴロイド」（於海洋文化館）また2006年には財団35周年記念シンポジウム「沖縄海人文化の系譜」に協力した。さらに2007年のハワイのホクレア号来訪時、ホクレア号日本航海寄港地科学教育イベント支援委員会の委員長を務め（後藤2009a）、ホクレア号のクルーを海洋文化館に招き解説を行い、財団による歓迎会にも協力するなど海洋博公園との関係を保つ努力を行った。

その後、松江所長から一代おいた後藤和夫所長によって平成2007年度初頭に動きがあり、再び三好氏を委員長に海洋文化館基本計画検討委員会が組織された。メンバーは副委員長として高良倉吉（当時琉球大学教授、現沖縄県副知事）、委員として豊見山和行（琉球大学教授）、比嘉政夫（沖縄大学教授）、上江洲均（久米島自然文化センター長）、涌井史郎（東京都市大学教授）の各氏および筆者であった。2010年度から千木良芳範氏（沖縄県立博物館副館長）が加わった。

さらに海洋文化館基本設計・実施設計検討委員会、ついで2009年度に海洋文化館実施設計委員会と会議が重ねられたが同年比嘉氏が死去した。所長は安達正明氏に交代する中、2010・2011年度には海洋文化館展示詳細設計委員会が継続された。その間三好委員長が2010年に逝去したため高良副委員長が委員長代理を務めて業務が継続された。筆者はたびたび高良氏から「海洋文化館更新の話は過去何度かあったが実現しなかった。今回がラストチャンスだよ」と激励された。

<資料調査と修復作業>

2007年の9月および2008年2月に筆者の勤務する南山大学人文学部人類文化学科のフ

2) 海工房は海洋博当時の有名な映像『チェチェメニ号の冒険』を製作した北斗プロダクション（その主管の門田龍太郎氏は門田修氏の兄）の流れを汲むプロダクションである。

ィールドワーク実習ゼミの学生を中心に展示ホール内および収蔵庫、倉庫に収集してある資料の悉皆調査を行った。調査報告書（牛山 1975）や当時の資料の手書き台帳（通称ピンクファイル）との記述の照合、保存状態の確認が主な目的であった。さらに 2009 年 9 月には前年調査でやり残した資料の点検と都市緑化植物園の収蔵庫に移動されていた資料の調査を行った。この結果、海洋博覧会当時収集されていた資料の一部は行方不明になっており、この時点で資料数は 1360 点ほどであることが確認された³⁾。度重なるこの資料調査のプロセスや参加者一覧に関しては詳細な記録がある（長谷川 2012）。

この間元興寺文化財研究所による資料修復作業が開始された。2009 年度に修復計画事業、2010・2011 年度には修復事業が行われ、カヌーの現場修復や展示品の研究所での修理やクリーニング作業が行われた。この一環で 4 隻の大型カヌー、タヒチ型ダブルカヌー、クラカヌー、ラカトイおよびサマ・バジャウのレパ船のレーザー測量が行われた。また収蔵庫 2 棟と映像ホール（プラネタリウム）は平成 2011 年 7 月に先行して完成した。

＜アドバイザー会議の設立と新規資料の収集＞

基本設計が委員会で認められ実施設計の段階になって、オセアニアおよび沖縄関係の専門家によるアドバイザー会議（いわゆる監修者会議）が 2009 年春に組織され第 1 回目の会合を 7 月に行った。オセアニア部門では涌井史郎氏と筆者が委員会から総合監修の任にあたったが、実質的にはオセアニア専門の筆者が他のアドバイザーや展示・映像担当業者と度重なる会議を重ねながら作業にあたった。会合は海洋博および東京、さらに各アドバイザーの勤務地で行われた。その役割分担は筆者および大西秀之、石村智両氏がゾーン 1、2、3（考古学部門）、4、および 6 の担当、また 6 つの個別テーマからなるゾーン 3 は漁労（竹川大介）、食（野嶋洋子）、住（丸山清志）、音楽（小西潤子）、装い（桑原牧子）、信仰（山田仁史）の各専門家がそれぞれ任にあたった。

沖縄部門は高良倉吉氏が委員長、上江洲均氏が民具担当、千木良芳範氏が博物館担当として入ったほか、舟・航海担当の板井英伸氏（当時沖縄大学地域研究所）、漁撈担当の上田不二夫氏（沖縄大学教授）、上原謙氏（糸満海人工工房代表）、そして映像担当の玉城淳博氏（写真家）が任にあたった。

アドバイザーは各地に散って新規資料の収集を行った。各監修者がフィールドで収集してきた資料は数え方によるが約 500 点である。そして今回の新展示で使われている資料は約 750 点であるが、うち旧資料約 350 点、新規資料約 400 点（うち沖縄ゾーン 114 点）という比率になっている。

3. 新展示の概要

海洋文化館は次の 7 つのゾーンに分けられている。

3) 資料の内訳は、メラネシア 502、ポリネシア 216、ミクロネシア 228、東南アジア 292、日本 122 となっている。

<ゾーン0とゾーン1>

ゾーン0は入り口のパネルで海洋文化館設立の趣旨やリニューアルの目的が日英両語で書かれ、歓迎の文字はそれ以外にハングル、北京、台湾語で表現されている。ここを入るとゾーン1だがこのゾーンは無料で通り抜けるウエルカムゾーンであり、タヒチ型ダブルカヌーが展示されている。このタヒチ型ダブルカヌーをいわば新海洋文化館のシンボルにしたのは、その美しいフォルムだけではなく、この種のカヌーはかつてキャプテン・クックがタヒチに來訪したときタヒチ王が神官や戦士を同伴して出迎えるのに使われたことより、來訪者を迎えるに相応しいシンボルであると考えたからだ。このカヌーはハワイのホクレア号と同じく、ハワイのカヌー研究者でデザイナーでもある、ハーバート・カネ（ハーブ・カネ）氏デザインによるものである。ゾーン1にはカネ氏の遺影とともにカネ氏がこのカヌーがタヒチで造られていた1974年頃、このカヌーの建造を担当した日本人スタッフ井上全氏へあてた直筆の手紙の数枚のうち一枚も展示されている。この手紙はNAVが系列である日本テレビの倉庫に保管してあった資料を、2011年に財団に返還してもらった中に筆者が見つけたものである⁴⁾。またこのゾーンにはこのカヌーを造ったタヒチのタウティラ村村長のサロモン氏が日本人にあてたタヒチ語の手紙（財団所有）も展示されている。

このカヌーには面白いエピソードがある。ポリネシアのダブルカヌーは西欧人が来たあと急速に衰退し、現在では実用的なダブルカヌーはタヒチにも存在しない。したがってこのカヌーはクックらの残した図面や絵画を元に復元されたものである。その元型となったのが上記、カネ氏のデザインなのである。さて1962年にハリウッドで封切られたマーロン・ブランド主演の「戦艦バウンティ」ではタヒチ出身の研究者を助言者として18世紀後半のタヒチの生活を現地で撮影した。そのときブライ船長のバウンティ号に押し寄せる無数のタヒチ型アウトリガーカヌーや王の乗るダブルカヌーを実際に建造したと言われる。担当したのはクックが「カヌー作りの村」と書いているタウティラ村民であった。そして現地の冒険家でカヌー研究者でもあるフランシス・コーウェン氏も協力している⁵⁾。

さて1960年代に「伝統的」ダブルカヌーの建造経験のあるタウティラ村に再び白羽の矢が立った。海洋文化館にポリネシア型ダブルカヌーを展示するために現地を訪れた井上氏はすでにポリネシアではそのようなカヌーは実在しないのを知った。彼はすぐさまホノルルのビショップ博物館にいて篠遠喜彦氏に相談するとカネ氏を紹介された。カネ氏は自ら設計図を書いてタヒチのタウティラ村に建造を依頼した。現在財団に残っているカネ氏の手紙には自分の設計図通り作るようになりに事細かに指示をだしている。たとえば紐はココヤシ紐だがそれはミクロネシア式の撚り紐ではなく、ポリネシア式の組紐にせよ、

4) この返還資料の中には1970年代資料収集にあたった研究者の直筆のカルテや数千枚のカラースライド写真が含まれている。スライドに関してはバジャウ族やバブア・ニューギニア、ソロモン諸島などの貴重な画像が少なくなく、デジタル化して公表が望まれる。

5) ハワイの復元カヌーホクレア号にまつわるコーウェン氏とハーブ・カネ氏との間の秘話に関しては：Pambrun 2007; 後藤 2013b。

などという具合である。

さて筆者は 2009 年にこのカヌーの来歴を求めて桑原牧子氏および田中幸織氏（財団職員）とともにタヒチのタウティラ村を尋ねた。このカヌーの建造に携わった村民のほとんどが他界していたが、カヌー建造をした場所が確認できた。そこには電信柱がありこれから電灯や電動鋸の電気を取ったという。そして当時の船大工棟梁の未亡人に会うことができた（後藤 2009b）。田中氏をもって来た写真を見せると突然夫人は涙ぐみ「亡くなった夫の魂が今戻ってきて見ているのがわかる。今までこの舟を大事にしてくれてありがとう（マルル）」と何度もお礼を言い、サロモン村長が日本にあてたタヒチ語の手紙のコピーも嬉しそうに声を出して読み上げた。

また 2010 年の調査では件のカヌーに使用された材質について聞き取りによる種の同定を行い、レーザー測量図から推測したカヌーの体積に各部材の密度を掛け合わせ全体の重さを推定した（Butaud, Gérard and Guibal 2008）。これは元興地文化財研究所が修復のためにカヌーを持ち上げる足場の強度を推測するためであった。またゾーン 2 に展示するためのカヌー模型を 2 隻作ってくれたアーティストのエリキ・マルシャン氏や映像において現地で協力いただいた日系の映像作家ダニー・ハザマ氏はタヒチ型ダブルカヌーの復元を計画しているが、海洋文化館のカヌーのレーザー測量図面が参考になると話している。

<ゾーン 2>

ゾーン 2 は 2 階とそれに続くロフト部で構成される。まず太平洋へのグレートジャーニを地図と映像によって 3 幕構成で展開している。(1)はアジアからの移動、(2)はオセアニアへの進出とラピタ文化、(3)はポリネシアへの移住である。またここには古代ポリネシア人が移住に使ったと思われるダブルカヌーに食料などを積んだジオラマが製作されている。

さらにこのゾーンのメインホール側にはカヌー模型の展示空間がある。東南アジアからメラネシア、ミクロネシア、ポリネシアに至る主なるカヌーの大型模型が 20 点展示されている。ほとんどが新展示のために現地で新たに作ってもらった資料で、約 1m の航海カヌーから約 60cm のパドリング用カヌーまで圧巻のコレクションである。資料はフィリピン、マヌス、マッシュム、ソロモン、ヴァヌアツ、フィジー、カロリン、マリアナ、マーシャル、パラオ、タヒチ、マルケサス、ハワイ、そして小笠原から入手している。サイズの関係で展示できなかった資料も含め約 20 隻が新調されている。

ロフト部にはミクロネシア・カロリン諸島の伝統航海術の回廊とカロリン諸島の航海カヌー建造の回廊である。両回廊の壁にはそれぞれ、航海師の誕生（人を育てる）およびカヌーの誕生（カヌーを造る）を 30m のバンドデシネ（絵巻）手法で説明している。この絵巻はサタワル島出身でホクレア号の航海師であったマウ・ピアイルグ氏の息子のアントニー・ピアイルグ氏に監修をお願いした。またロフト上には関連する展示物や画像が置かれている。

ロフトから見下ろすと青い巨大な太平洋地図が俯瞰できる。ロフトで囲まれた空間の1階には長さ 30m、幅 15m の巨大な太平洋の地図が床に展開する。手前から奥にかけて人類の移動にそってアジアからニューギニア周辺、メラネシア、そしてミクロネシア・ポリネシアへと地図上を歩むことができる。諸島や島には名称が入っているが、その表現や取捨選択を巡って監修者の間で大きな議論が展開された。なお地図の名称は北を上にして横書きではなく、人類の移動方向、つまり東（館内では奥側）を上にして横書きされている。つまり普段見慣れている地図と比べ文字列が 90 度回転し南北方向に記載されているので、人類の移動にそって西から東に歩くと新鮮な感覚を得るであろう。

床地図の手前には人類移動を探る科学ということで考古学、言語学、人類学による人類移動の映像とグラフィックが展開されている。考古学部門ではハワイのビショップ博物館の篠遠喜彦氏が釣針の型式編年などを説明する映像がながれ、ミニ篠遠研究室のような観を呈する。言語学の部門は民博の菊沢律子氏に監修をお願いしているが、オーストロネシアやパプア圏約 30 箇所から同語彙を発音している映像と音声画面で検索して見られるようになっている。人類学部門は科博の篠田謙一氏（遺伝学）と海部陽介氏（形質人類学）の監修を仰いでいる。

巨大な床地図には楽しい仕掛けが施されている。移動型プロジェクターで床面の海を海亀、飛び魚、鯉、鯨の親子などがときおり泳ぐのである。そして最後に父鯨が奥の大型スクリーンでジャンプするとスクリーンでは「ねえ、僕たちはどこからどうやってきたの？」という子供の問いかけとともに、ポリネシアの古老が孫たちに過去の大航海の伝説を語る物語が始まる。この映像はクック諸島のアイツタキ島民によって演じられた物語である。老人が白砂のビーチに座って 2 人の孫である兄妹にかつて祖先が行った大航海について語るのである。語りはもともと現地語だが、日本人の声優による吹き替えが行われている。また近年作られたダブルカヌーを使って実際に島民が古代の出で立ちをしてカヌーに豚や鶏、またココヤシなどを積んで出航の準備をするシーンも挿入されている。また古代ダブルカヌー船団が海を渡り嵐に遭遇するシーンは CG によって表現されている。

<ゾーン 3>

一階のゾーン 3 の入り口には太平洋の島の多様性を直感するために、高い島タヒチ島と低い島マジロ環礁のジオラマが展示してある。その先には上述の床地図が展開し、両側のロフト部の下に「海洋文化のひろがり」6 部屋が置かれている。その詳細は担当した各専門家に任せたい（本誌次号所収）。

<ゾーン 4>

○クラカヌー

広いスペースのこのゾーンは海の交流をテーマに、3 隻の航海カヌーが展示されている。まず海洋博当時にパプア・ニューギニアのトロブリアンド諸島で収集されたマサワ型のク

ラカヌーである。マリノフスキの『西太平洋の遠洋航海者』で有名なクラ交易のために使われたカヌーである。このカヌーは伝説的なテレビ番組「すばらしい世界旅行」でクラ交易を取り上げたときに実際に使われたカヌーで、クラ船団を率いた首長のトコバタリアが乗っていた、いわば旗艦である。このカヌーはキリウィナ島の北ヤルムグア村で建造されたトイラムラ・グーヤウ号である。そしてこのカヌーは島南にあるシナケタ村（マリノフスキの調査の基点）のトコバタリアが南方のアンフレット・ドブー方面に首飾りを取りに行くときに借用されたものである。すなわち「すばらしい世界旅行」はこの借用されたカヌーが活躍したのである。

私はこのカヌーの来歴調査のために 2011 年キリウィナ島を訪れたときヤルムグア村の関係者とシナケタ村の関係者と面談した。シナケタ村で写真を見せて訪ねると、当時トコバタリアに伴ってクラ交易に参加した古老 2 人と巡り会うことができた。2 人とも写真を見せるとこのカヌーが今でも原型をとどめていることにたいそう驚いた。1 人は「自分だけ生き残ってこのカヌーに再び巡り会え、死んだ仲間申し訳ない」と語った。

このカヌーが日本に移譲されたあと、ヤルムグア村では再びトイラムラ・グーヤウ号が建造され映像に収められたが (Malnic 1998)、その後その舟は朽ち果ててしまい跡形もない。すなわち海洋文化館にある 1 世号が健在で 2 世号はすでに消滅してしまったわけである。このカヌーを建造した首長ナルブタウの甥でクランの首長を継ぐ立場にあるジョン・カサイプウォロヴァ氏とポートモレスビーで会うことができた (Malnic 1998)。彼に写真とレーザ測定の図面を見せると、ぜひこれを参考にして伝説のカヌーを復元したいと語った。ヤルムグア村では首長ナルブタウが東のキタヴァ島に腕輪を取りに行くときに乗っていた古老が一人存命であった。古老によるとこの舟はスピードも速く、舳先の模様がすばらしいので交易相手はそれに魅了されて交易もうまくいったのだと懐かしむ。

ところで海洋文化館の旧展示は誤っていたと筆者は考えている。というのは、クラカヌーはつねにアウトリガーを風上側に置き、同時に帆は帆柱の風上側に置かれるのだが、旧展示では帆が逆側に備えられていた。新展示では筆者の指導のもとこれを是正した。またこのカヌーは前後同型、つまりどちらにでも走ることができる。クラ交易は季節風を利用して首飾りないし腕輪を決まった島に取りに行くため、基本的に 2 方向にしか走らない。そのとき常にアウトリガーを風上において決まった側を舳先にして行くのである。トロブリアンドであれば首飾りをとりに南方のアンフレット諸島やドブー島方面に行く場合と、腕輪を取りに東方のキタヴァ島に行くかのいずれかである。そして舳先にある波よけ板と舳先板の装飾の微妙な違いでそれが峻別され、それらの名称も異なる (Campbell 2002:72-76; 後藤 2013a)。新展示ではキタヴァに向かうという想定で設置されている。

○ラカトイ

次に目を引くのがパプア・ニューギニアの首都ポートモレスビー付近にすむオーストロネシア系集団モツ族のラカトイである。ラカトイはラカ=カヌー、トイ=3、ということ

で文字通り三艘の丸木船をならべたトリプルカヌーである。かつて乾燥地に住んでいたモツ族がパプア湾奥、フライ川の湿地帯に住む集団から食料であるサゴデンプンを交易で得るため、大量に女が作る土器を運んでいったものである。これはヒリ交易と呼ばれる。

このカヌーも前後同型である。つまりどちら側を前にしても走ることができる。しかしヒリ交易は 2 つの氏族が共同で行うといわれる。そしてそれぞれが舟の前後に陣取って、行きは氏族 A の方を舳先に、帰りは氏族 B の方を舳先にして帰るというしきたりがあった。舟の中央のマストの根本には航海安全を祈るために聖なる少年が座っていた。

本格的ヒリ交易は 1950 年代に終了したと言われる。しかし 1974 年パプア・ニューギニア国独立のとき英国のエリザベス女王来訪を記念してラカトイが復元された（牛山 1975: 17）。展示されているカヌーはそのとき造られたカヌーの一隻である可能性がある。2011 年に行ったパプア・ニューギニア国における来歴調査でこのカヌーの日本移譲を文化局で担当したあと政治畑を歩み、今は貿易関係の仕事をするモイ・アヴェイ氏と会った。氏の名詞にはラカトイがデザインされ「日本と新しい時代のヒリ交易を作りたい」と言っていた。「ヒリ」という言葉が彼らにとって交易・貿易の代名詞となっている。

海洋文化館のラカトイは記録によると当時パプア・ニューギニア国から来た船大工が沖縄の大工を指導してこの館内で組み立てが行われたようである。財団にある NAV 帰りの資料の中にそのような写真を筆者は見いだしている。なおこのラカトイの帆であるが不自然に小さいことに気がつく。ラカトイを写した古い写真を見ると、帆柱は船体と同じくらいの長さがある。しかし館内では実寸にすると帆が天井に支えてしまうために約 2/3 の長さに縮小したというのが実情のようである。

今回の展示ではこの舟そのものには細かい修復以外には手をつけていないが、現地でモツ族の女性に土器を焼いてもらってこの舟とともに展示をしている。その女性はモツ族最後の土器製作者でありその模様は映像記録に収めてある。またレーザー測量から起こした正確な図面をもとに、帆も実寸大にし、土器を積み甲板の真ん中に聖なる少年も座っている当時の交易中の様子を再現したジオラマを製作し、舟の脇に展示してある。

○カロリン諸島の航海カヌー

海洋博当時、カロリン諸島から航海カヌーチェチェメニ号が来訪したことは有名である（その模様は DVD「チェチェメニ号の冒険」、海工房参照）。しかしこのカヌーはその後大阪の民博に展示されている。今回の新展示、とくにゾーン 2 ではカロリン諸島の航海術やカヌー建造がメインのテーマである。しかしカヌーの実物がないのは「画竜点睛を欠く」状態である。新展示には航海カヌーを入手すべし、できればカヌーを新造しその過程を映像記録に収めるべし、という委員会案を入れて当時の安達所長が決断し、今回のリニューアル最大の目玉としてカロリン諸島航海カヌー建造プロジェクトが開始された。

筆者は 2011 年建造地の選定のための調査を行った。理想的にはこの種のカヌーが生活で生きているカロリン諸島の離島を考えた。また次善策として離島の人たちにヤップ、あ

るいはグアムやサイパンなどで作ってもらうという可能性である。しかしグアムやサイパンでカロリン諸島の舟を造るという不自然さ、また長期にわたって離島民に村から離れて働いてもらうという困難さを考え、最終的に 2011 年当時交通の便が一番確実であったポロワットで建造することに決定した。

ポロワットにした理由は筆者と長年親交のあった航海師、グアム在住のマニー・シカウ氏が協力を申し出たことと、彼の属するグアムの NPO 法人 TASI (Tradition about seafaring islands) に作業や謝金の管理を確実に依頼できるという理由であった。これにはミクロネシア連邦特命全権大使ジョン・フリッツ氏からの助力を得られ、またポロワット島の首長テオ・オノペイ氏も「若い世代に航海カヌー作りを伝授する良い機会」ということで全面的な協力を表明していただけたのが幸いであった。

2012 年 3 月、海工場のスタッフと筆者はポロワット島を訪れ、島民への説明のあと船体にするパンノキの伐採が儀礼をともに行われた。その後カメラマンと TASI のスタッフが島に残り、製作の全工程を映像に収めた。

2013 年 2 月、カヌーが完成して航海を待っていたときシカウ氏がグアムで急逝するという緊急事態が持ち上がった。しかし彼の遺志を継ぐ首長で航海師の称号を持つテオ氏ら 8 人が予定通りポロワットからグアムまで 800 キロの航海を 2013 年 6 月に成し遂げた。この航海には海工場の宮澤京子氏が同乗しその全行程を映像に収めた。カヌーはグアムで解体され日本に輸送、その後テオ氏らが来日され 2013 年 8 月後半に海洋文化館内で再組み立てを行ってもらった。

チェチェメニ号は日本に展示するために既存のカヌーを利用したものであった。リエン・ポロワット号は木の伐採から航海まで 100 時間以上の映像記録が残され、館内で行った塗色にも島から持って来た炭や黄土など伝統素材で仕上げられた。

<ゾーン 5>

ここは沖縄部門担当者のゾーンなので簡単に触れるにとどめる。このゾーンでは沖縄の海洋文化、とくにサバニと漁撈文化について展示してある。今回の展示の目玉のひとつとしてマルキンニ（丸木舟）を西表島で数十年ぶりに琉球マツから建造した（マチキフニ＝松木船）。さらにサバニの発達が一目でわかるように、糸満で建造したホンハギとナンヨウハギを並べ、その隣にはタンクブニ（タンク船）が置かれている。

<ゾーン 6>

出口のゾーンである。ここには 2010 年ソロモン諸島で行われた太平洋芸術祭のときに集合したカヌーの写真に、新海洋文化館は 21 世紀の今、太平洋各地で進みつつあるカヌールネサンスや文化復興をリアルタイムで発信するための場としてこそ意味があるといった趣旨の文章が添えられている。ここが今後未来に向けて発展していくゾーンである。

4. おわりに

筆者は10年という歳月をかけてやっと完成にこぎ着けたことで、とにかくほっとしている。この間、2度にわたる政権交代など色々なことがあった。とくに東日本大震災が起こったときには事業の中断あるいは縮小も覚悟したが業務は継続した。困難を経て誕生した今回の新展示が箱物作りで終わらず、今後日本や周辺諸国の人々の交流促進の場になることを筆者は願う。一隻ずつストーリーがある4隻の大型カヌーは、それぞれ違った形で現地社会との絆再構築と意識覚醒につながった。このように海洋文化館は古いエキゾチックなものの展示館ではない。今日のオセアニア社会への扉なのである(後藤 2009a)。

海洋文化館の資料は1970年代に短期間で収集されたため、太平洋史のある瞬間を見せてくという意味で貴重である。筆者はこの仕事に携わってからヨーロッパ、とくにドイツやイギリスの民族学関係の博物館を20カ所以上見学に訪れたが、カヌーコレクションはそれらと比べても遜色ないと確信した。密かにベルリン、ハンブルクの民族学博物館、オークランド海洋博物館と並んで世界4大オセアニアカヌー博物館ではないかと考えている。

海洋文化館は事業を無事完遂させた現在の鈴木修二所長のもと2013年7月に部分的な先行オープンをした後、9月に一旦閉じられ、10月11日にグランドオープンした。筆者もその式典に出席し挨拶を仰せつかったが、列席したジョン・フリッツ大使も挨拶の中でこの館への期待を滲ませた。

最後に海洋文化館は今後シンポジウムや学会あるいはワークショップなどに有効活用されるのを願う。ちなみ2014年には開館記念シンポジウムが計画されている。

参考文献

Barton, F.R.

1910 Annual trading expedition to the Papuan Gulf. In: C.G. Seligman, *The Melanesians of British New Guinea*, pp. 96-120. Cambridge: Cambridge University Press.

Campbell, S.

2002 *The Art of Kula*. Oxford: Berg.

Dutton, Tom (ed.)

1982 *The Hiri in History*. Pacific Research Monograph 8.

藤巻光浩

2008 「海洋文化交流展示からポスト植民地主義の移民博物館へ：「沖縄海洋文化館」にみる本土復帰の記憶」『湘南フォーラム：文教大学湘南総合研究所紀要』12: 101-111。

後藤 明

2003 『海を渡ったモンゴロイド』、講談社。

2009a 「オセアニア航海カヌー文化復興：ホクレア号と日本」遠藤央・印東道子・梅崎昌裕、中澤港・窪田幸子・風間計博他編『オセアニア学』、pp. 473-483、京都大学出版。

2009b 「海洋文化館蔵のダブルカヌーの来歴について：タヒチ型ダブルカヌーの文化的及び歴史的背景の考察」『海洋文化に関する事業報告』、pp.12-47。 沖縄海洋博覧会記念公園管理財団。

2013a 「オセアニアのカヌー研究再考—学史の批判的検討と新たな課題」、『南山大学人類学研究所研究論集』 1: 217-264。

2013b 「文化遺産を証明する旅—ホクレア号プロジェクト」山本真鳥・山田亨編『ハワイを知るための 60 章』、pp.191-195、明石書店。

後藤明・石村智

2011 「ショーテン諸島のアウトリガーカヌー：南山大学人類学博物館および沖縄海洋博公園海洋文化館の資料紹介」『南山大学人類学博物館紀要』 29: 39-56。

長谷川真美

2012 「博物館・整理作業におけるモノとヒトの民族誌—海洋文化館とその資料の足跡を追う」、南山大学提出修士論文。

市岡康子

2005 『クラ：貝の首飾りを探して南海をゆく』、コモンズ。

Malnic, Jutta with Kasaipwalova, John

1998 *Kula: Myth and Magic in the Trobriand Islands*. New South Wales: Cowrie Books.
日本工業新聞社

1973 『海洋博ハンドブック』、通商産業省企業局・沖縄国際海洋博覧会協会。

如法寺慶大

2013 「コトラオルカヌーとは何か? : パラオにおけるコトラオルカヌーのカテゴリーに関する物質文化研究」、南山大学提出修士論文。

Pambrun, Jean-Marc T.

2007 *Francis Paura Cowan: Le Maître de la Pirogue Polynésienne—Tahua Va'a*.
Pate'ete: Éditions le Motu.

多田 治

2004 『沖縄イメージの誕生：青い海のカルチュラル・スタディーズ』、東洋経済新報社。

牛山純一

1975 『75 EXPO 日本政府出展：海洋文化館調査報告』、NAV（日本映像記録センター）。

財団法人沖縄国際海洋博覧会協会

1975 『海洋博公式ガイドブック』、講談社、財団法人沖縄国際海洋博覧会協会。

『日本オセアニア学会 NEWSLETTER No.107』 正誤表

5頁12行目 誤) 元興地文化財研究所
正) 元興寺文化財研究所